CPAS
Center for Pacific and American Studies

Newsletter

The University of Tokyo Center for Pacific and American Studies

Vol.4 No.2 March 2004

巻頭寄稿
Race in America Fifty Years After Brown
Eric Foner ……1P
「自由」の定義・再定義の場としてのアメリカ合衆国史
——エリック・フォーナー 夏期連続セミナー参加記
荒木　和華子 ……3P
歓迎——アラン・ケリヒア客員教授
死、臨終および緩和ケアにおける、社会科学の役割について
——アラン・ケリヒア セミナー参加記
古澤　有峰 ……4P
送　辞
山本吉宣先生を送る
油井　大三郎 ……5P
スタッフ・エッセイ
ウルムチ紀行 2004年1月
石井　明 ……6P
研究セミナー参加記
Economics, Equity and the Environment: Market Based Environmental Laws and Environmental Justice
——スティーヴン・ジョンソン セミナー参加記
篠儀　直子 ……7P
フォークソングからみるネイティブハワイアンの経験
——ジェフリー・カマカヒ セミナー参加記
森　仁志 ……7P
17世紀キリスト教世界の「周縁」についての宗教社会学的考察
——チャールズ・コーエン セミナー参加記
荒木　純子 ……8P
資料余滴
アメリカ太平洋地域研究センターと映像資料
宮地　裕美子 ……9P
センター所蔵目録の電子化について
宮内　智代 ……10P
2003年度研究活動報告 ……11P

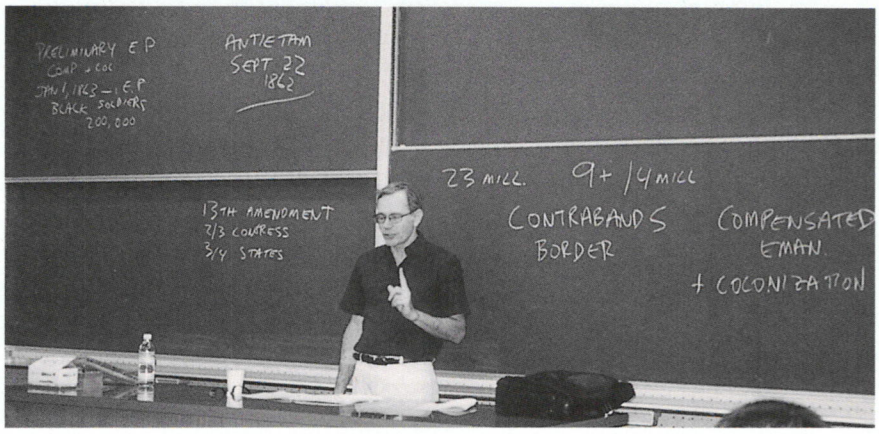
Race in America Fifty Years After Brown

Eric Foner
(Professor, History Department, Columbia University)

In the year 2004, the United States will celebrate the 50th anniversary of the Supreme Court's decision in Brown v. Board of Education, which declared racial segregation in public schools unconstitutional. The anniversary has already inspired discussion of how race relations has evolved in the last half-century, and how far American society still has to travel to achieve the goal of an integrated society.

Compared with the situation in 1954, the most dramatic change in American life in the early 21st century is the absence of legal segregation and the presence of blacks in areas of American life from which they had once been almost entirely excluded. In unprecedented numbers, blacks now work alongside whites in corporate board rooms, offices, and factories. In the year 2000, 37% of the black population had attended college. The economic boom of the late 1990s aided black Americans enormously; the average income of black families rose more rapidly than white. (It began to drop again, however, when the boom ended.)

Most African-Americans, nonetheless, remain in a more precarious situation than whites or many recent immigrants. The black unemployment rate remains double that of whites, and their median



エリック・フォーナー氏／コロンビア大学教授

family income of $29,000 and poverty rate of 26% put them behind whites, Asians, and Latinos. Half of all black children live in poverty, two-thirds are born out of wedlock, and in every index of social well-being from health to quality of housing, blacks continue to lag. Despite the continued expansion of the black middle class, a far lower percentage of blacks than whites own their homes or hold professional and managerial jobs.

Despite the nation's growing racial diversity, school segregation — now resulting from pervasive housing segregation and the divide between urban and suburban school districts rather than laws requiring racial separation — has increased during the past decade. Most city public school systems consist overwhelmingly of minority students, large numbers of whom fail to receive an adequate education. During the 1990s, the courts released more and more districts from desegregation orders. Today, the nation's black and Latino students are more isolated from white pupils than in 1970. Nearly 80% of white students attend schools where they encounter few if any pupils of another race. Since school funding rests on property taxes, poor communities continue to have less to spend on education than wealthy ones.

One way in which black communities differ markedly from other Americans today lies in their extremely high rate of imprisonment. In the 1970s, with urban crime rates rising, politicians of both parties sought to convey the image of being "tough on crime." They insisted that the judicial system should focus on locking up criminals for long periods rather than rehabilitating them. During the 1990s, thanks to the waning of the "crack" epidemic and more effective urban police tactics, crime rates dropped dramatically across the country. But because of the sentencing laws of the previous two decades, this did nothing to stem the increase of the prison population. Today, it exceeds two million, ten times the figure of 1970. Several million more individuals are on parole, probation, or under some other kind of criminal supervision. These figures dwarf those of every other western society.

Members of racial minorities experience most strongly the paradox of growing islands of unfreedom in a nation that prides itself on liberty. In 1950, whites accounted for 70% of the nation's prison population and nonwhites 30%. Today, these figures have been reversed, partly because of the severe penalties facing those convicted of using or selling crack, common among the urban poor, as opposed to powder cocaine, the drug of choice in suburban America, which leads to far lighter sentences. Over one-quarter of all black men can expect to serve time in prison at some time during their lives.

With 29 states denying the vote to those on probation and seven barring ex-felons from voting for their entire lives, an estimated four million black men (13% of the black male population) cannot cast a ballot. Felony disenfranchisement — not hanging chads or the presence of Ralph Nader on the ballot — was the main reason Al Gore lost Florida and the last presidential election.

Overall, despite the civil rights revolution, the nation has failed to address the plight of the urban poor. This is not, of course, simply a "racial" question, nor are blacks the only racial minority, or even the largest, having been surpassed by Latinos. But given the long history of racial slavery and segregation, the status of blacks continues to pose a special challenge to American society.

フォーナー氏　巻頭寄稿文
— 抄 訳 —

公立学校での人種別学撤廃を定めたブラウン判決後のこの50年の公民運動の結果、法的差別の撤廃、専門職への進出、黒人子弟の大学進学率の増大、黒人中産階級の創出という成果が見られる一方、大半の黒人は非常に貧しい生活を余儀なくされている。米国社会で人種の多様性が増大するなか、郊外化、黒人への住宅制限、人種別学撤廃政策の緩和に伴い、都市中心部の公立学校ではこの10年で人種分離という逆行現象が生じた。1970年以降の厳罰主義を旨とする法制度強化に伴い黒人コミュニティは深刻な影響を受けた。黒人の服役率が白人に比して高くなったこと、また服役囚は自由を失うのみならず、服役後も多くの州で民主主義の根幹である投票権を停止・剥奪されるからである。以上の諸問題は都市貧困層に共通のものだが、黒人の蒙ってきた長きにわたる奴隷制と人種差別を鑑みれば、黒人の地位向上は米国社会において達成すべき特別の課題であり続けているといえよう。

（松井　領明）

「自由」の定義・再定義の場としてのアメリカ合衆国史
エリック・フォーナー 夏期連続セミナー参加記

荒木　和華子

「自由」[1]という言葉ほど、アメリカ社会の歴史全体を根底から力強く突き動かしてきたものはない。エリック・フォーナー教授の研究から多くを学んできたセミナー参加者の大半が、外交、社会、政治、人種、宗教などの多分野に目配りの利いた講義と熱のこもった語り口に触れ、自由の史的概念と機能をめぐる、教授の主題の重要性を再確認することになった。

2003年7月28、29日の両日にわたり「19世紀アメリカにおける奴隷制、自由、奴隷解放」(Slavery, Freedom, and Emancipation in 19th Century America) と題する夏期連続セミナーが開催された。両日とも大講義室はフォーナー教授の言葉を聞き漏らすまいとする大学院生を中心とした受講者の熱気であふれた。初日午前のテーマは「奴隷制、自由、アメリカ革命」(Slavery, Liberty, and the American Revolution) で、午後は「奴隷制と奴隷制廃止」(Slavery and Abolition)、二日目午前は「南北戦争、奴隷解放、アメリカの自由の変容」(The Civil War, Emancipation, and the Transformation of American Freedom)、そして午後は「再建、合衆国における自由の意味」(Reconstruction and the Meaning of Freedom in the United States) で、その後大講義室にて歓迎レセプションが催された。焦点は南北戦争前後にありながらも、実際には約2世紀ものスパンを自由に行き来しながら事例が引用・参照される講義は圧巻で、異なる時代を専門とする聴衆の興味関心をも惹きつけて離さない。再建史研究の領域を超え、自由思想をめぐって独自な枠組みの構築を続けるフォーナー教授の研究蓄積を存分に堪能することのできる、誠に贅沢なセミナーであった。

「なぜアボリショニストが後の社会運動においてモデルとなったのか」との質問に対して、フォーナー教授は、変革、平等、自由を定義する効果的な言葉を創造したからではないかと応答した。それは、教授が「第二次再建」とする公民権運動で用いられた言語がその遺産であり、言葉自体は暴力的であっても実際には平和的な行動を戦略としたことからも推察される。常に「言葉」(物事の筋道、論理) を尊重・追究した日本の再建史家、故辻内鏡人氏の、研究は自らを語る言葉の模索過程と似ているのではないかという問いかけが想起された。皮肉にも、歴史上あまりに多角的に採用されてきた自由という言葉は、今日、以前にも増して論理と現実との関係性を不透明にするブラックボックスとなってしまったようである。公民権運動を経て自らのアプローチを練成してきたフォーナー教授のように、社会の改革をめぐる諸言語の検討を自らの足元から辿っていく方途を模索する必要性を改めて痛感した。

(あらき　わかこ:
一橋大学大学院／フロリダ大学大学院)

[1] フォーナー教授によればlibertyとfreedomの両者は交換可能な用語として認識・使用されている。

熱心にノートをとる参加者

歓迎――アラン・ケリヒア客員教授

死、臨終および緩和ケアにおける、社会科学の役割について
アラン・ケリヒア セミナー参加記

古澤　有峰

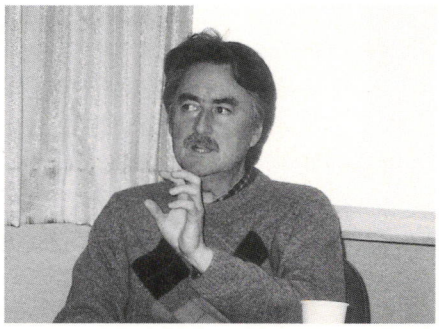
2003年11月26日、オーストラリア、ラトローブ大学より、アメリカ太平洋地域研究センター客員教授として来日中の、アラン・ケリヒア氏のセミナーが行われた。"The Role of the Social Sciences in Death, Dying and Palliative Care"と題された講演は、ケリヒア教授の専門分野である、医療社会学の知見が十二分に生かされたものとなった。ラトローブ大学保健学部教授、また終末期医療センター長を務め、特に死の文化的・社会的意義の考察についての研究で、母国オーストラリアに限らず内外で知られるケリヒア氏の講演は、実践における知見と理論的研究とを組み合わせた、厚みのある興味深い内容であった。

はじめに、オーストラリアにおける医療社会学者達が、死の臨床研究にどのように関わって来ているのかについての報告がなされた。まず、死の臨床研究は主に科学者達というよりも、実際に医療の実践を行う人達（医師、医療関係者、看護の専門家、医療研究者等）によって行われて来た事が説明された。その理由は、死のプロセスというのは生物医学的文脈のみならず、社会的な文脈が多く含まれているからであり、死の社会的理解によって、はじめてケアの社会的モデルが準備され、提供されるようになるからである。これは、死の臨床研究に関して、理系文系の垣根を越えた、様々な分野からの興味および参加が必要な事を示唆しており、非常に重要な指摘と考えられた。

次に、臨死体験研究の歴史と経緯の説明がなされた。人間の死生と深く関わる臨死体験は、宗教やスピリチュアルな領域とも深い関わりがある事から、西洋社会においてはニューエイジ運動や東洋宗教への関心との組み合わせで興味を持たれる状況が存在する事、またその為に、臨死体験研究の歴史は常に、科学的な証明を欲する方向性と、比較文化的視点の必要性との、二つの間で揺れ動いて来たが、科学的に私達が知り得る事柄には依然として限りがある事、また死の臨床研究の一部としての臨死体験研究は、そのような状況を踏まえた上で、従来様々な角度から行われて来ており、それは神経科学、医学、生物学、生化学など多岐にわたっている事、等が説明された。

続けて、このような臨死体験についての研究が、社会的現実の一側面として、それぞれ終末期医療や緩和ケアの研究者および実践者達によって注目されて来た事、またそこで現れるディスコースが、どのようにそれぞれ公衆衛生や社会福祉政策に役立つものとなっていくのかについて、様々な例と共に説明がなされた。ここでは特に、社会医学が治療・治癒等もさることながら、予防をより念頭に置いたコンセプトを持つ事、また初期の介入によって害を最小限にする手法や、コミュニティーという視点の重要性等が紹介された。また、特に緩和医療においては、患者のウェルビーングという観点から、従来の社会的、心理的、身体能力的項目と共に、現在はその症状への対処、またスピリチュアルな次元が重視されるようになっている事等が説明された。

最後に、死の教育の重要性についての指摘がなされ、また前述の臨死体験からの生還者達の例を挙げ、死に臨む体験をした後にこちら側に戻って来た、そのような人達への心のケアの重要性が説明された。実際問題としては、そのような臨死体験経験者を初めとした、死をめぐる様々な過酷な体験（終末期にある患者、重傷を負った患者、またその家族等）をした人達へのケアの制度は不十分であり、特にこのような人々への、より適切なケアやサポートを供給する為にも、医療関係者に対する、死に関する臨床的教育の必要性が指摘された。また死に瀕する人達と、公衆衛生研究に携わる人々との間の、実質的なコミュニケーションというのはかなり限られており、この点についての改善が、真の意味でのQOLの向上につながる、というのは大変重要な指摘であった。



アラン・ケリヒア氏／CPAS客員教授

参加者からの質疑応答の中に、このような講演を聞いたのは初めてであり、あらためて死について語る事のタブーが、様々な文脈で存在していた事に気付かされた、という意見があったのは象徴的であった。おりしも日本においても、死の教育がどのようになされるべきか、その議論が様々なところで行われ始めているところである。また、同じ東大の本郷キャンパスにおいても現在、COEプログラム「死生学の構築」が立ち上げられ、学際的なポジションから人間の生と死についての議論が活発に行われている。

ケリヒア教授からは、今年は本郷キャンパスにおいても、そのオーストラリアで蓄積されて来た実践の知を、様々なシンポジウム等で御紹介頂く予定である。生と死をめぐる問題は、現代の日本社会の中でますますその重要性を増しており、その意味でも今回CPASで行われた講演は、日本における今後の死生学にも一石を投じうるものとなるのではないだろうか。関連分野を研究する立場の者として、そのような予感を持ったセミナーであった。

（ふるさわ　ゆみ：
東京大学大学院／COE特任助手）

◆2003年10月23日、CPAS会議室において、アラン・ケリヒア教授の歓迎会が開かれた。

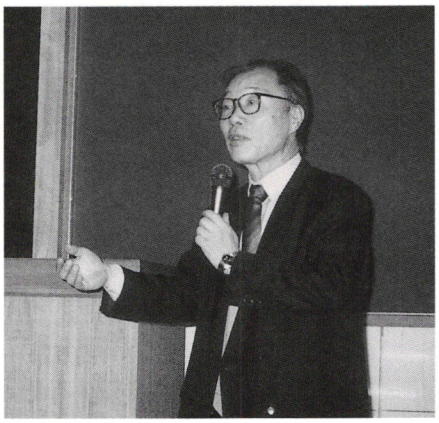
左から、矢口祐人 助教授／アラン・ケリヒア 客員教授／シーラ・ホーンズ 助教授／油井大三郎 教授／谷内　達 教授／石井　明 教授

左から、能登路雅子 教授／スティーヴ・オーディン フルブライト招聘講師／篠儀直子 助手／遠藤泰生 教授

送　辞

山本吉宣先生を送る

油井　大三郎



最終講義をなさる山本吉宣教授

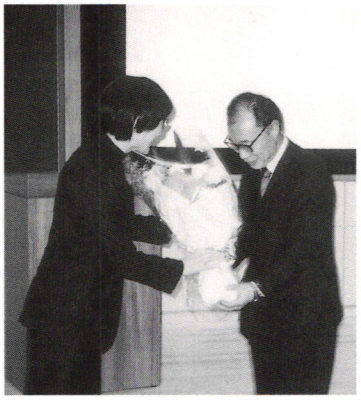
2000年度から2001年度までの2年間CPASに所属された山本吉宣先生が今年度限りで駒場を定年で辞められると伺い、感慨深いものがある。個人的には、学部、大学院時代の2年先輩にあたる山本先生が定年を迎えられたという感慨であり、いずれ自分もという時の移ろいの早さを感じさせられるからである。

また、山本先生は1995年度から1997年度までの3年間、まだ改組前のアメリカ研究資料センターの運営委員長を務めてくださった。当時はセンターの改組が日程にのぼっており、山本先生は学部全体との調整などで色々ご苦労されたと伺っているし、実際に改組案の作成にもご協力くださっただけに、2000年度から現在のアメリカ太平洋地域研究センターへの改組が決定したときには共に喜びを分かち合ったものであった。

さらに、1998年度から2002年度までの5年間は文部省の大型科研費による「米国太平洋変動」の共同研究において安全保障班のまとめ役としてご尽力いただき、全体の牽引車的な役割を果たしてくださった。その成果は6巻本の形で2004年中に刊行される予定であるが、その内の1冊は安全保障班の担当であり、山本先生が編者を務められている。

こうして山本先生とセンターとの関わりを振り返ってみると、改めて感謝の気持ちで一杯である。本来であれば、国際関係論課程の重鎮としてのお仕事に専心すればよい立場の山本先生が文句一つ言わずにセンターの維持、発展、改組に献身的にご協力くださったのである。しかも、改組後は2年間CPASに移籍され、研究年報『アメリカ太平洋研究』の初代の編集委員長を務めてくださった。このような献身は山本先生の人柄の優しさの表れであり、改めて頭の下がる思いである。この4月から山本先生が駒場におられなくなると思うと、不安な気持ちであるが、今後は別な形でセンターを応援してくださると幸いである。山本先生には健康に留意され、益々の活躍を期待して、お礼と送別の言葉にかえる次第である。

（ゆい　だいざぶろう：CPASセンター長）



宮内智代CPAS助手より花束贈呈

スタッフ・エッセイ

ウルムチ紀行 2004年1月

石井　明

「新疆国際大バザール(市場)」の入口付近

2004年1月、中国新疆ウイグル自治区の政治的中心、ウルムチ市に出かけた。北京から飛行機で3時間半。ウルムチが近づいてくると、眼下に雪に覆われた天山山脈が現れる。天山、すなわち天の山とはよくいったものだ。どう形容すればよいのか迷うのだが、太陽の光を浴びた嶺々には神々しさを覚える。

ウルムチとはモンゴル語で「緑の牧場」という意味だ。しかし、市内ではもはやオアシスの面影を探すのはむつかしい。筆者が新疆に来たのは3回目、前回からは10年以上たっているが、高いビルが並び、中国の他の大都市同様、大気汚染がひどくなった。

新疆は人口1,905万の内、少数民族が1,146万、漢族が760万で少数民族の方がまだ多い(2002年のデータによる)。少数民族の内、最も多いのがウイグル族で869万だ。

驚いたことに、昨年から新疆の各大学では、ウイグル人教授がウイグル人学生にウイグル語で講義することが禁止されてしまったそうだ。つまり漢語で講義せよ、ということである。中国には外国人留学生の漢語のレベルを測定するためのHSK(漢語水平考試)というテストがある。古参教授も、このテストを受けて一定のレベルに達しないと、教壇に立てなくなったのである。

ウイグル医学の病院

これは一例だが、明らかにアメリカで9・11同時多発テロ事件が起きた後、少数民族に対する圧迫が強まっている。9・11事件の後、諸国は国内政治の文脈でテロを勝手に定義した。ロシアがチェチェンの紛争を国際テロの一環と主張したように、中国は新疆の少数民族が独立・自立を求めて引き起こす暴力事件を国際テロの一環と主張した。中国当局の発表では、1990年から2001年の間、テロリストが少なくとも200件のテロ事件を起こし、162名が死亡、440名以上が負傷した、という。ウイグル人を含むトルコ系少数民族は1940年代、東トルキスタン共和国という独立国を中国領内に打ち立てたことがある。その再建を目指す根強い運動があり、中国当局は力で押さえ込もうとしていた。

アメリカの国内には新疆における人権抑圧を問題にしていた人達もいたのだが、2002年、アメリカ政府は「東トルキスタン・イスラム運動」をテロ組織と認定した。これにより、中国当局は国際的な認知を受けて、新疆の少数民族の運動に対処できるようになった。昨年5月、中国政府は「新疆の歴史と発展」(いわゆる新疆白書)を発表し、新疆は前漢(紀元前206-24年)時期から、中国という統一的多民族国家の不可分の構成部分となり始めた、と主張し、新疆史の再解釈を行った。ウイグル人大学教授が漢語での授業を迫られるのもこうした文化的な圧迫の一環ととらえねばならないだろう。

最後に一番ショックだったこと。ガイドをしてくださったウイグル人女性と街を歩いていた時のことだ。ウイグル人の男と彼女が口論になった。筆者はウイグル語を全く知らず、後から知ったのだが、その男は我々の後を付けてきて、筆者に道を聞いたのだそうだ。筆者は道を尋ねられたことさえわからなかった。彼女はていねいに道を教えたが、その男の狙いは筆者がウイグル人でないことを確認したうえで、異民族・異宗教の男と並んで歩く若いウイグルの女性を非難することにあった。彼女の顔につばを吐き、執拗に罵倒し続け、あげくは殴りかかろうとさえした。詳しくは教えてくれなかったが、「民族敗類」(民族の面汚し)といった類の言葉を浴びせたそうだ。彼女にはすっかり辛い思いをさせてしまった。そういえば、日本留学の経験のある彼女は甘さを抑えた日本のチーズ・ケーキがおいしい、と言っていた。今度、ウルムチを訪れる時は日本のチーズ・ケーキを持っていこう。「こんにちは」とか「ありがとう」位はウイグル語で言えるようにして。

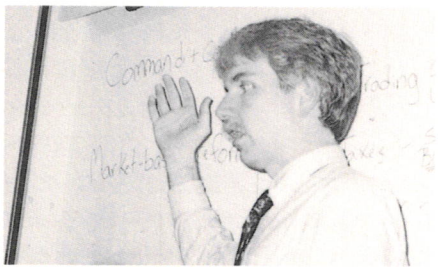
(いしい　あきら:CPAS教授)

研究セミナー参加記

Economics, Equity and the Environment: Market Based Environmental Laws and Environmental Justice

スティーヴン・ジョンソン セミナー参加記

篠儀　直子



スティーヴン・ジョンソン フルブライト招聘講師

2003年6月23日、アメリカ太平洋地域研究センター会議室において、フルブライト交換教授スティーヴン・ジョンソン教授によるセミナー"Economics, Equity and the Environment: Market Based Environmental Laws and Environmental Justice"が、学部生や学外からの参加者も迎えて開催された。この日の講義の主なテーマは、この30年のあいだに合衆国で見られた、公害問題への対処法の変化というものである。内容を以下に記述する。

1970年代以来合衆国では、環境に対する汚染限界基準を国家が定めるという方針（command-and-control approach）が取られてきた。この基準を守らなかった企業には、厳しい処罰が科されていた。しかし1990年頃から、市場性を基盤とする方針が採られるようになる（market-based programs）。具体的な内容として、たとえば以下のような対策が出現した。①汚染限界が地域単位で定められ、その地域における汚染総量がその限界を超えないかぎりにおいて、汚染排出量を各企業が相互に譲渡し、配分し合える。②汚染排出源である企業に対し、汚染排出量に応じて課税を行なう。③政府の規定量より多く汚染排出量を削減できる場合、当該企業は法や規制の対象から除外されることが可能になる。

いま述べた対策に共通して言えることは、これらの対策がすべて、汚染排出源である企業に対し、経済的視点に基づく選択の機会を与えるものだということである。いずれの場合においても、企業は汚染排出量削減のためにかかる技術的コストと、規制対象となることにより生じるコストとを比較して、より利潤性の高いほうを選ぶことができる。また、これらの対策を採ることによって政府の側も、汚染基準を制定するためにかかっていた労力と資金とを大幅に削減できるほか、以前の方針を採っていた場合よりも効率よく財源を確保することが可能となる。したがって、1990年頃から現在まで主流となっているこの公害対策方針は、経済的側面にもっぱら注目した、コスト効率を最優先する対処法であったと言える。

しかしこれらのアプローチはまた、以下のような問題点を生み出してきた。①汚染配分の不公平が、低所得者やマイノリティのコミュニティを直撃している。汚染限界総量を地域単位で指定しているこの方針のもとでは、実際のところ集中的に汚染が生じている箇所が出現せざるをえず、それらの箇所はほとんどの場合、そうしたコミュニティのなかに位置している。これらのコミュニティの住民は、その消費行動などの理由から、汚染源である企業の関心をほとんど引くことがない。かくして公害対策から取り残されたこれらのコミュニティは、そのうえ、汚染に関する情報を充分に得ることもできず、汚染総量を査定したり汚染回避のために交渉を行なったりする専門家を雇う資金も持っていない。②残余している汚染の除去には莫大なコストがかかるため、かつて汚染を排出していた工場の跡地には買い手がつかず、新たに郊外が開発される傾向がある。そのため中心部には汚染された土地が取り残されていくことになる。

こうした状況への対処策としては、まず何よりも、政策決定に対する市民参加の機会を拡大せねばならない。その過程の一環として、低所得者やマイノリティのコミュニティが集中的な損害をこうむらないよう、市民に対する情報開示を徹底すること。そして、コミュニティがその経済力のいかんにかかわらず、専門家の援助を得ることを可能にするようなシステムを作り上げること。以上のような解決策を最後に提示して、講義は終了した。

引き続き設けられた質疑応答の時間には、学生も含めて多くの参加者からの活発な質問が出された。

（しのぎ　なおこ：東京大学助手）

フォークソングからみるネイティブハワイアンの経験

ジェフリー・カマカヒ セミナー参加記

森　仁志

ジェフリー・カマカヒ セント・ジョンズ大学教授

2004年1月19日、ミネソタのセント・ジョンズ大学より、フルブライト招聘講師として東北大学に来日中のジェフリー・カマカヒ氏のセミナーが行われた。セミナーの会場に入ってまず目を引いたのが、カマカヒ氏の手元に置かれてあるヤマハ製のギター。氏はハワイのミュージックアワード「ナホク賞」受賞者の兄デニス・カマカヒと、かつてバンドを組んでいた経験もあるアマチュア・ミュージシャンだ。セミナーの出席者の中にも、ウクレレを手にした人の姿がみえる。いつもとは明らかに違う、わくわくする雰囲気の中でセミナーははじまった。

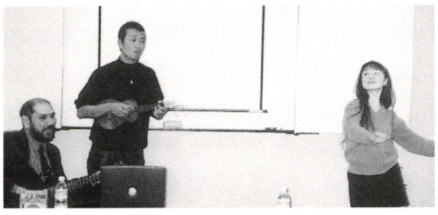
発表のテーマは、ハワイアンのフォークソングを重要なテクストとみなし、そこからネイティブハワイアンがもつ問題意識やその変化を読み取るというものだった。ジェー

ムズ・クックのハワイ到着以降から現在にかけて、時代ごとに10曲が選ばれた。発表の趣旨と一通りの曲名の紹介が終わると、カマカヒ氏は会場の電気をすべて消すようにリクエストする。薄暗くなった会場のスクリーンには、フォークソングの歌詞が映し出された。

まずは、Hi'ilaweという曲が紹介された。このテクストから氏が読み取るのは、ネイティブハワイアンの伝統的な表現方法である。具体的には、現在ほとんど話者のいないハワイ語が当然のように使用されていること、基本的にシンプルなチャントによって曲が構成されていること、さらには、彼らが住む場所や自然への繊細な意識を指摘する。そして、ギターを手にしたカマカヒ氏は、やさしくHi'ilaweを歌いあげた。

次のLeahiという曲は、ハワイ王室の権力が次第に弱まっていった時代につくられたものである。この時代から次第に、西洋文化の影響がハワイアンのフォークソングにもあらわれはじめる。ワイキキにある有名なダイヤモンドヘッドは、もともとネイティブハワイアンの間ではレアヒ(Leahi)と呼ばれていたという。しかし、その後西洋人によって名づけられたダイヤモンドヘッドという名が一般的となり、ネイティブハワイアンたちもその呼び名をうけいれることとなる。ところが、彼らはただ単にうけいれるのではなく、自分たちが発音しやすいようにカイマナヒラ(Kaimana Hila)と呼んだ。そしてこのLeahiという曲では両方の呼び名が使われている。

以下、時代がくだるにつれ、ハワイアンのフォークソングには西洋文化からの影響が色濃くみられるようになっていった。しかし、ネイティブハワイアンたちは、単純に西洋文化に圧倒されて自らの文化を失っていったのではない。Leahiという曲のエピソードにもみられるように、彼らは西洋文化を自分たちに役立つように変化させて取り入れるなどして、したたかに抵抗してきたのだった。ここですべてを詳しく紹介することはできないが、続けて演奏されたKaulana Nā Pua、Waiomina、Pelekane、Royal Hawaiian Hotel、Kāne'ohe、Maile Swing、Wāhine 'ilikea、Ku'u Home O Kahalu'uといった曲のテクストからも、カマカヒ氏は、ハワイの合衆国への不当な併合、軍事・観光産業の発展、ハワイアンルネサンス、主権回復運動などといったネイティブハワイアンたちの歴史的な経験とそれに対する先鋭な問題意識を読み取る。



カマカヒ氏の演奏に合わせて飛び入りでウクレレを弾く神保滋氏とフラを踊る古賀まみ奈氏

カマカヒ氏は、今後もネイティブハワイアンを研究する上では、人種、ナショナリティ、エスニシティ、アイデンティティといったキーワードがますます重要なものとなってくるだろうと指摘する。また同時に、ネイティブハワイアンとマオリの連帯などこれまで存在しなかった汎太平洋の規模での連帯や交流の広がりにも注目する。

セミナーの最後には、出席者の飛び入りで、カマカヒ氏と即興の音楽セッションが行われた。カマカヒ氏のギターにあわせ、出席者はウクレレやフラを披露してくれた。氏が指摘するように、汎太平洋の規模での文化の交流が着実に進んでいることを、セミナー会場にいながらにしてまさに現在進行形で実感することができた。

(もり　さとし:東京大学大学院)

17世紀キリスト教世界の「周縁」についての宗教社会学的考察

チャールズ・コーエン セミナー参加記

荒木　純子

2004年1月30日、ウィスコンシン州立大学マディソン校の歴史学部教授及び宗教学研究センター長である、チャールズ・コーエン教授のセミナーが開催された。名著*God's Caress* (1986)ではピューリタンの宗教体験、とくに回心の心理に焦点があてられていたが、今回の話題は一転して"Early Modern America and Japan as Peripheries of Christendom"というものであり、いったい何が飛び出すのかという期待を胸に、当日を迎えた。

今回のコーエン教授の冒険的な試みをひとことでまとめれば、キリスト教史という大きな文脈から17世紀の世界をみて、日本とニューフランスにおけるイエズス会の活動と、ニューイングランドにおけるピューリタンの活動を、「原住民」への布教活動 ("indigenous churches")として比較分析することにある。キリスト教化に当時最も成功した日本をも初めて比較対照することにより、北アメリカではヨーロッパ人たちが次々に移住し持ち込んだ教会("colonial churches")の繁栄が現在のキリスト教大国を創り上げたこと、逆に日本では徳川幕府が当初の成功を徹底的にくじいたためキリスト教国とはならなかったことが示された。またミッショナリーがその地に足を踏み入れる目的が異なっていたことにもその差を生む原因があったという。ニューフランスとニューイングランドの場合には移住及び領地獲得が最終的な目的で、軍事力も行使されたが、日本の場合には貿易の相手という側面が最も強かった上、徳川幕府という堅固な政治体制に阻まれ、布教活動が功を奏さなかったのである。

演題中の"Peripheries"ということばが示唆するように、コーエン教授が伝えようとしているのは、日本人とネイティヴ・アメリカンという「原住民」への布教は「フロンティア」への移動ではなく、イマニュエル・ウォーラーステインの世界システム論でいう「周縁」への移動だったということであろう。17世紀の文明のありようを考えてみても、いささかヨーロッパ中心的に過ぎるアプローチとも思えるが、キリスト教史という軸に重心があるため必然といえるだろう。たしかにカトリシズムとプロテスタンティズムという歴史、秘蹟、布教方法などの違いがある中、17世紀の日本とニューフランス、それにニューイングランドという三者を同時に論じられるのかという疑問はあり得る。しかしそれでもこのような切り取り方は、宗教社会学として一定の有効性をもつと思う。在来宗教が優勢を保つ中に別の宗教が組織としていかに入り込むかが、時代を越えて塗り替えられていくある特定地域の、そしてなにより世界の、勢力地図の分析と切り離せない要素であることは、今や自明となりつつあるからである。

さて、*God's Caress*を読んでも推測できることだが、好きな英語がシェイクスピアと欽定訳聖書というコーエン教授のことばは絶え間なく流れゆく川のようで、リ

ズムの波にシニシズムやパンが浮き沈みする、詩的言語パフォーマンスとなっていた。これが17世紀のピューリタンになら"plain style"として高級エンターテインメントになるのかしらという想像をふくらませながら、学外からの若い参加者たちとともに、ときに笑い、ときにびっくりしながら、たいへん愉快なひとときを過ごしたのだった。

コーエン教授は神の抱擁を受けた17世紀の人々を、世界を舞台としてキリスト教の長い歴史の中に位置づけることに大きなミッションを感じていらっしゃる。その教授の"brave new world"への知的冒険は、この先どこに向かうのであろう。もともとは組織としての宗教よりも個人の良心が選び取る信仰に重きをおく立場のコーエン教授のことでもあり、今後の行く手から目が離せない。

（あらき　じゅんこ：CPAS研究員）

チャールズ・コーエン ウィンスコンシン大学教授

資料余滴

アメリカ太平洋地域研究センターと映像資料

宮地　裕美子

機会あり、アメリカ太平洋地域研究センター（愛称は「アメセン」）が所蔵する映画ライブラリーを整理する手伝いをした。その作業をするうち、ライブラリーにはどのような傾向があるか知りたくなった。

センターは、その存在意義からも当然ながらアメリカに関する映像メディアを多く所蔵している。次に多いのがオーストラリアに関わるもので、これは数年来センターと親しく関わってきた客員教授らの実績に負うところが大きいようだ。

それではアメリカ、オーストラリアを問わず、どのようなジャンルのものが所蔵されているか？ ここでは特にアメリカを扱った映画などを瞥見してみたい。

さて、アメリカ映画といってすぐに思い出すのは、ハリウッドの娯楽作品だろう。しかし、アメリカ太平洋地域の研究者に開放されたセンターという性質上、ジム・キャリーのような俳優が出てくる映画はいまのところない。

わたしたちは、ハリウッド資本が製作する作品、すなわちアメリカを代表するような映画を、劇場で見逃したとしてもあまり時間を経ずにビデオなどで観ることができる。たとえば日系移民研究をしている研究者が、社会をあらゆる角度で切り取る監督アラン・パーカーが描いた作品からヒントを得ることがあるかも知れない。彼が第二次世界大戦下の日系人収容所を舞台に描いた*Come See the Paradise*（邦題『愛と哀しみの旅路』）は、1990年に発表された。これは、日系の収容所を描く数少ない資料のひとつとしても価値があり、研究者はビデオ屋で借りて何かのヒントを得るだろう。センターはこの作品こそ所有していないが、2001年10月に行われた公開シンポジウム「アメリカの中のアジア文化」にパネラーとして来日した日系俳優マコ・イワマツ演出の『*And the Soul Shall Dance*—そして心は踊る』を所有する。このビデオはレンタルビデオ屋に行って手にすることのできない、センター所蔵の貴重なメディア資料のなかでもとりわけ大切なものだ。

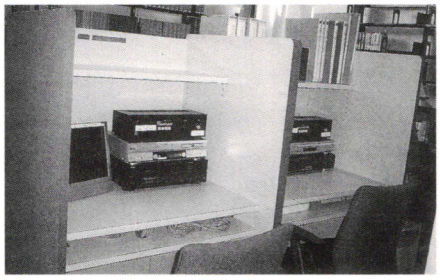
日系に限らず移民関係の映像資料で、普通お目にかかれないドキュメンタリー・フィルムがセンターには愛蔵されている。*Who Killed Vincent Chin?* や*Sa-I-Gu: From Korean Women's Perspectives*、*Out of Ireland*などがそれだ。これらのフィルムが描くのは母国の歴史であり、あるいは彼らが移り住んだアメリカの発展そのものの歴史である。発展するアメリカで生き、「アメリカ合衆国」を築いたひとたち、そんなEmigrants、Immigrantsの等身大の姿が語られる。

アメリカ太平洋地域研究センターの映像ライブラリーには、上述したEmigrants、Immigrantsとは異なる形で歴史の皮肉でアメリカに連れて来られたアフリカン・アメリカンのメディア資料がある。1977年に製作された*Roots*が代表的なもので、全6巻から成る。

所蔵ビデオのリストをしばらく見ていると、いくつかキーワードが浮かんでくる。アメリカを表すキーワード。まずは「大統領」。ルーズベルトやアイゼンハワー、ニクソンなどの歴代大統領を取り上げたものや歴史的に重要な人物の伝記を描いた映画が数本ある。大統領選挙そのものを取り上げた映画も1本ある。

そしてアメリカ太平洋地域研究センターのメディア・コーナーでひときわアメリカを物語るものとして存在感をもって棚に並ぶのが「ベトナム」と「9/11」を扱った資料だろう。

「ベトナム」に関するメディア資料の中には、なかば強制的にアメリカに移らざるを得なかった人たちの歴史が描かれていることに気付かされる。そのひとつ、*Vietnam: A Television History*は8本から成り、ベトナム戦争を描いたものであるが、「難民」といわれる人たちを描いた個所がある。*Loin du Vietnam*（邦題『ベトナムから遠く離れて』、1967年）のように、かの



視聴用DVDブース

地の宗主国であったフランスの名だたる監督たちが、戦時下でもどっこい生きていくベトナム民衆の芯の強さを淡々と描き、それが却って胸に迫る作品もある。クロード・ルルーシュ、ジャン・リュック・ゴダールらが監督した116分の希少性の高い、価値ある長編作品だ。一方、2002年に作られた*The Quiet American*もあり、ベトナム戦争以前のサイゴンが舞台になっている。

サタデー・ナイト・ライブの25周年を記念した映像集(1999年製作)は、MTVとともに、こうした番組がテレビ誕生から四半世紀を経てテレビ界に旋風を巻き起こし、次第に国民的番組になっていくさまをつぶさに映し出す。アメリカの音楽史や笑いのルーツを知るには格好の資料だろう。時間が許せば観たいものに、メジャー・リーグ選手伝があり、昨今進出目覚しい日本人メジャー・リーガーの活躍ぶりを観ることもできる。

同時多発テロから1年を経て当センターが主催した国際シンポジウムの模様をまとめ上げた3巻のDVDは、時間数にして291分から成り、熱い議論に沸く会場を捉えた貴重な映像だ。

これからもアメリカ太平洋地域研究センターは、アメリカのみならずオーストラリアに関するメディア資料を入念に収集していくだろう。アメセンを訪れる多くの方々が、駒場の「映る宝の山」から、少しでもヒントを見つけて、それぞれの研究成果や楽しみに結びつけていかれることを願ってやまない。

(みやじ　ゆみこ:CPAS科研スタッフ)

センター所蔵目録の電子化について

宮内　智代

アメリカ太平洋地域研究センターは、図書室の所蔵目録を紙のカードからオンライン蔵書カタログ「東京大学OPAC」[1]へ移行する作業を過去数年にわたり段階的に行ってきた。開架図書のOPACへの遡及入力と、書庫に保管されていた資料の整理およびその目録登録が主たる作業内容である。センター所蔵の目録情報をすべて電子化するにはまだ時間がかかるが、平成14年度をもって最初の目的であった一般図書・雑誌に関する情報の整理と入力がすべて完了したので、所蔵資料の電子化の現状を報告したい。

基本的に図書については、後述の「高木八尺文庫」などの特別コレクションをのぞき、すべてOPACへの登録が完了している。これで前のように、近年購入した図書についてはOPACを検索し、それ以前の古い図書についてはカード目録を確認するといった混乱した状況は解消された。現在では、開架資料だけでなく書庫に閉架された資料についても、OPACでの検索が可能である。また、貸出状況や修理製本中など、図書の在籍に関する情報もオンライン上で確認することができる。[2] 同様に雑誌についてもすべての情報をOPACから確認できる。以前は、受入状況がすぐにOPACへ反映しなかったため、OPACで受入タイトルを確認し、別リストで受入巻号を確認する必要があったが、現在はすべてシステム上での受入処理をしているため、最新号の受入状況や欠号および製本状況なども、OPACでわかるようになっている。

マイクロ資料は、現在OPACへの登録作業を進めている段階である。『CPAS Newsletter』前号の「資料余滴」でマイクロ資料コレクション"Pamphlets in American History"内の1,500タイトルのOPACへの登録を報告したが、マイクロコレクションの各一点ずつの書誌登録は多くの時間と人手のかかる作業であり、一朝一夕にできるものではない。そのため残念ながら、すべてのマイクロ資料の登録は、まだ当分先のことである。現在はマイクロ資料のコレクションのタイトルリスト[3]をCPAS ホームページ[4]上に掲載している。また、視聴覚資料(ビデオ・カセットテープ・CD-ROMなど)も、マイクロ資料と同様にOPACへの登録が完了していないため、ホームページにそれらのリストを公開している。

この他、センターはいくつかの特別コレクションを所蔵している。これらの資料は未整理または整理中の段階にあり、OPACからはほとんど検索することができない。しかし、その中の高木八尺文庫については、特に利用問い合わせが多いので、その整理状況と閲覧の可否について、ここで説明を加えておきたい。

高木八尺文庫は、日本におけるアメリカ研究の先駆者であり、東京帝国大学法学部ヘボン講座(現アメリカ政治外交史講座)の初代担当者でもあった、高木八尺先生(1889-1984)が長年にわたり収集された文献資料から構成される。高木先生はこの資料をひろくアメリカ研究者に公開することを希望され、当センターに寄贈された。約3,500冊の図書・雑誌および、キャビネット約10台の資料からなるこのコレクションは、アメリカの政治・憲法関係および隣接諸分野に関する文献を主とする。この中には今日では入手困難な貴重資料も数多く含まれている。また、高木先生が保管していた太平洋問題調査会(IPR: Institute of Pacific Relations, 1925-1961)関連の資料もそこに収められている。図書に関しては一般図書として公開する予定であるが、キャビネット内の資料については別室に保管し、整理・目録作成済みの部分のみ「高木文庫利用申込願」に記入の上、館内で閲覧を許可している。この閲覧可能な資料は、主にIPRに関する資料であり、その目録[5]は、製本された形でセンター閲覧室のレファレンス書架に配架されている。なおアメリカ研究資料センター時代に作成されたこの目録は、早稲田大学教授の山岡道男先生が研究代表を務められた「アジア太平洋地域ネットワークの構築とINGO—その過去と現在、将来への展望—」科研で、平成14年度に新たに電子化された。電子化されたファイルは山岡先生のご好意により、近日中にCPASホームページで公開される予定である。多くの研究者の方に利用して頂きたいと願っている。

(みやうち　ともよ:CPAS助手)

[1] 東京大学OAPC
http://opac.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/

[2] 基本的に図書・雑誌については、OPACから所蔵場所や書架の在籍状況がわかるようになっている。OPACで特に貸出中やコメントのついてない資料については、所定の書架に在籍しているはずである。しかし、残念ながら紛失や配架ミスなどの事情から、OPAC上で存在するはずの図書が見つからない場合もある。もし、遠方から特定の資料を目的にセンターを利用される場合は、所属の大学図書館経由で「所蔵問い合わせ」や「取り置き予約」などのサービスを利用してほしい。

[3] マイクロ資料のうち、新聞・雑誌をマイクロ化した資料についてはすべてOPACへの登録が終わっているため、このリストからははずれている。

[4] CPAS ホームページ
http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/

[5] 『東京大学アメリカ研究資料センター所蔵 高木八尺文庫太平洋問題調査会関係資料目録』、中見真理編(センター請求記号:R016:T64)。

2003年度研究活動報告

Ⅰ. 研究会

テーマ	講師（所属機関）	司会	期日	共催者
Building Bridges: Japanese American National Museum and the Arab American Community	Irene Hirano (Japanese American National Museum)	能登路雅子	2003.4.9	アメリカ学会 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP)
ミシンの政治経済と文化－近代日本消費社会史研究序説－	Andrew Gordon (Harvard University / University of Tokyo)	油井大三郎	2003.4.22	アメリカ学会
Gender Vocabularies Used by Young People to Discuss Feminism and Gender Issues in Australia and Japan	Chilla Bulbeck (CPAS, University of Tokyo / Adelaide University)	エリス俊子	2003.5.7	
"Please Don't Package Our Aloha": Local Responses to State Sponsored Tourism in Hawai'i	John Rosa (Arizona State University)	矢口祐人	2003.5.23	アメリカ学会 基盤研究(B)「都市の表象に関する新歴史主義的研究」
Between Texas and Japan: Idioms of Race, Nation, and Identity	Ramón Saldívar (Stanford University)	能登路雅子	2003.6.9	アメリカ学会 UTCP
On Being an American Writer	Bharati Mukherjee (Writer / University of California, Berkeley)	遠藤泰生	2003.6.20	アメリカ学会
Economics, Equity and the Environment: Market Based Environmental Laws and Environmental Justice	Stephen Johnson (University of Tokyo / Mercer University)	林文代	2003.6.23	アメリカ学会 UTCP
Feminism, Pacifism, and Radicalism in 1960s America	Theresa Kaminski (University of Wisconsin, Stevens Point)	瀧田佳子	2003.6.25	UTCP
Slavery, Freedom, and Emancipation in 19th Century America	Eric Foner (Columbia University)	遠藤泰生	2003.7.28 2003.7.29	アメリカ学会 UTCP
The Role of the Social Sciences in Death, Dying and Palliative Care	S. Allan Kellehear (CPAS, University of Tokyo / La Trobe University)	油井大三郎	2003.11.26	UTCP
The Native Hawaiian Experience through Folksongs	Jeffrey Kamakahi (Saint John's University / Tohoku University)	矢口祐人	2004.1.19	アメリカ学会 基盤研究(A)(2)「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」
Early Modern America and Japan as Peripheries of Christendom	Charles Cohen (University of Wisconsin, Madison)	遠藤泰生	2004.1.30	アメリカ学会
American Philosophy in R. M. Pirsig's Novel *Zen and the Art of Motorcycle Maintenance*	Steve Odin (University of Tokyo / University of Hawai'i)	ホーンズ・シーラ	2004.2.6	アメリカ学会 UTCP

Ⅱ. シンポジウム

『亜細亜と米国―開国の衝撃とその波動』

日　時：2003年11月8日　14時～17時

場　所：東京大学大学院数理科学研究科大講義室

共　催：東アジア四大学フォーラム
文部科学省研究費補助金 基盤研究(A) (1)
「アジア系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」

プログラム：

司　会…油井　大三郎（東京大学教授・アメリカ太平洋地域研究センター長）

挨　拶…兵頭　俊夫（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻教授）

報　告…茅　海建（北京大学歴史学部教授）
「中米関係の起源およびその影響」

チェ・ジョンウン（ソウル大学外交学部教授）
「アメリカとの交流が韓国の歴史に残した痕跡」

ヴー・ミン・ザン（ベトナム国家大学ハノイ校副学長）
「越米関係の起源とその歴史的教訓」

三谷　博（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻教授）
「アメリカと東アジアの外交秩序の変容」

コメント…遠藤　泰生（東京大学アメリカ太平洋地域研究センター教授）

Ⅲ. 研究プロジェクト

- 文部科学省研究費補助金・基盤研究(A) (1)
「アジア系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」（代表：油井大三郎）
- 文部科学省研究費補助金・基盤研究(A) (2)
「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」（代表：能登路雅子）
- 日米文化教育交流会議（カルコン）デジタル教材開発WGへの協力（代表：能登路雅子）
- 21世紀COEプログラム「共生のための国際哲学交流センター」への協力

Ⅳ. 出版活動

- Laura Hein and Daizaburo Yui, eds. *Crossed Memories: Perspectives on 9/11 and American Power*. CPAS, University of Tokyo, 2003.
- 油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ――世界の中のアメリカニゼーション』（アメリカ太平洋研究叢書）東京大学出版会（2003年7月）
- 『CPAS Newsletter』Vol.4, No.1（2003年10月）、No.2（2004年3月）
- 『アメリカ太平洋研究』第4号（2004年3月）

Ⅴ. センター所属教員の本年度の研究活動

◆油井　大三郎

共編著

- 油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ――世界の中のアメリカニゼーション』東京大学出版会（2003年）
- 五十嵐武士・油井大三郎編『アメリカ研究入門（第3版）』東京大学出版会（2003年）
- Laura Hein and Daizaburo Yui, eds., *Crossed Memories: Perspectives on 9/11 and American Power*, CPAS, University of Tokyo, 2003.

分担執筆

- 「非同盟主義との遭遇――1947-1960年の米印関係」秋田茂・水島司編『現代南アジア6――世界システムとネットワーク』東京大学出版会（2003年）
- 「米国のナショナル・アイデンティティと戦争の記憶」中谷猛・川上勉・高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』晃陽書房（2003年）
- 「覇権国アメリカの戦争観と日米関係」同時代史学会編『戦争と平和の同時代史』日本経済評論社（2003年）

論文

- 「日米関係と戦争の記憶」『聖学院大学総合研究所紀要』第26号別冊（2003年3月）
- 「アメリカの世紀と帝国のあいだ」『アメリカ史研

究』第26号（2003年7月）

書評
- K・ブース、T・ダン編、寺島隆吉監訳『衝突を超えて』日本経済評論社、『週刊読書人』（2003年6月13日号）
- 古矢旬『アメリカニズム』東京大学出版会、『リヴァイアサン』（2003年10月号）

その他
- 時評「エスカレートする対テロ戦争とアメリカ知識人」『東京大学教養学部報』第467号（2003年7月2日）
- 「山本吉宣先生を送る」『CPAS Newsletter』4巻2号（2004年3月）、5頁
- 座談会「『新たな秩序』を地域の側からとらえなおす」李鍾元、油井大三郎、酒井啓子、高原明生、内藤正典、臼杵陽『地域研究論集』国立民族学博物館・地域研究企画交流センター、5巻1号（2003年2月）

◆石井　明

共編著
- 石井明・朱建栄・添谷芳秀・林暁光編『記録と考証――日中国交正常化・日中平和友好条約締結交渉』岩波書店（2003年）
- 木村汎・石井明編『中央アジアの行方――米ロ中の綱引き』勉誠出版（2003年）

分担執筆
- 「中国におけるナショナリズムと国際主義――朝鮮戦争参戦の評価の変遷を中心に」大津留(北川)智恵子・大芝亮編著『アメリカのナショナリズムと市民像――グローバル時代の視点から』ミネルヴァ書房（2003年）
- 「協調と競合の中ロ関係」木村汎・朱建栄編『イラク戦争の衝撃――変わる米・欧・中・ロ関係と日本』勉誠出版（2003年）

その他
- 「30年ぶりに封印を解かれた発言を聞いて」『中央公論』（2003年4月号）
- 「ウルムチ紀行 2004年1月」『CPAS Newsletter』4巻2号（2004年3月）、6頁
- 「山本吉宣先生を送る」『東京大学教養学部報』第471号（2004年1月）

発表
- 「大学の国際化戦略とアジアの留学生」21世紀留学生戦略研究会主催「21世紀の留学生戦略シンポジウム」（2003年12月6日）、国際研究交流学生村「東京国際交流館」

◆遠藤　泰生

共編著
- 油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ――世界史の中のアメリカニゼーション』東京大学出版会（2003年7月）。（第1部解説「「内的アメリカニゼーション」と多元社会の模索」18-34頁、第2部解説「「境界的アメリカニゼーション」と対抗アイデンティティの形成」130-37頁を分担執筆。）

分担執筆
- 「日米関係：文化」五十嵐武士・油井大三郎編『アメリカ研究入門・第3版』東京大学出版会（2003年10月）、226-33頁。

論文
- "Memory Divided By More Than An Ocean: The Pacific War in Japan and the US,"『アメリカ太平洋研究』第3号（2003年3月）、65-76頁.

その他
- 「アメリカ太平洋研究の行方――国際シンポジウム・プロシーディングス刊行の意義」『アジア太平洋地域の構造変動における米国の位置と役割に関する総合的研究・ニューズレター』5巻1号（2003年4月）、42-44頁。
- 「特集「米国と亜細亜――開国の衝撃とその波動」」『アメリカ太平洋研究』第4号（2004年3月）、5-8頁。

発表
- 「アメリカを教えること、アメリカを研究すること」『日本のアメリカ研究の課題』、日本アメリカ学会第37回年次大会（2003年6月1日）、神戸大学。
- "National Space and the Pacific Ocean: Japanese and American Narratives of the 1853-54 Perry Expedition," with Sheila Hones, Royal Geographical Society, London,September 6, 2003.
- "Imperial Eyes, Still?: Japan and the Concept of the Pacific or the Pacific Region," Symposium, "Asia Meets America: Rethinking the Origins of Asia-U.S. Relations," BESETOHA, Komaba, University of Tokyo, November 7, 2003.

◆矢口　祐人

分担執筆
- 「ハワイのカウボーイ：パニオロとアメリカニゼーション」油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ――世界史の中のアメリカニゼーション』東京大学出版会（2003年）

論文
- "American Objects, Japanese Memory: American Landscape and Local Identity, in Sapporo, Japan," *Winterthur Portfolio* 37 2/3 (2002), pp.93-121.

翻訳
- アリス・ベーコン『明治日本の女たち』（共訳）みすず書房（2003年）

その他
- 「ぼくがフラを習う理由（わけ）」『CPAS Newsletter』4巻1号（2003年10月）、13頁。

発表
- "Place of Metamorphosis?: Transnationalizing Memory at Pearl Harbor," Asian Studies Association, New York, 2003.
- "Transnationalizing War Memories: Japanese Visitors at the Arizona Memorial," American Studies Association, Hartford, 2003.
- "Transnational Memories at Pearl Harbor," 日本アメリカ学会第37回年次大会（2003年6月1日）、神戸大学。

◆宮内　智代

その他
- 「センター所蔵目録の電子化について」『CPAS Newsletter』4巻2号（2004年3月）、10頁。

◆荒木　純子

論文
- "The Anatomy of Possession: Witchcraft and Religious Enthusiasm in 17th Century New England,"『アメリカ太平洋研究』第3号（2003年3月）、77-93頁。

その他
- Assistant Editor, Laura Hein and Daizaburo Yui, eds., *Crossed Memories: Perspectives on 9/11 and American Power*, CPAS, University of Tokyo, 2003.
- 「中学生も来た！――「総合的な学習の時間」at CPAS Library」『CPAS Newsletter』4巻1号（2003年10月）、14-15頁。
- 「17世紀キリスト教世界の「周縁」についての宗教社会学的考察――チャールズ・コーエン セミナー参加記」『CPAS Newsletter』4巻2号（2004年3月）、8-9頁。
- 「さつき会の利用法――新生東大女子卒業生同窓会へのお誘い」『東京大学教養学部報』第466号（2003年6月）

来客の紹介

◆2003年12月9日、マサチューセッツ工科大学の宮川繁教授来訪。同大学でジョン・ダワー教授とともに進めている「ペリー来航150周年展示」の概要の紹介をうける。

アメリカ太平洋地域研究センター運営委員会（2003年度）

大学院総合文化研究科・教養学部		
（センター長・運営委員長）	油井 大三郎	教授
（評議員）	木畑　洋一	教授
（言語情報科学専攻）	鍛冶　哲郎	教授
（言語情報科学専攻）	林　文代	教授
（超域文化科学専攻）	山下　晋司	教授
（超域文化科学専攻）	中島　隆博	助教授
（地域文化研究専攻）	中井　和夫	教授
（地域文化研究専攻）	能登路　雅子	教授
（国際社会科学専攻）	山本　吉宣	教授
（生命環境科学系）	友田　修司	教授
（相関基礎科学系）	岡本　拓司	講師
（広域システム科学系）	谷内　達	教授
（委嘱委員）	木村　秀雄	教授
（センター）	石井　明	教授
（センター）	遠藤　泰生	教授
（センター）	矢口　祐人	助教授
大学院法学政治学研究科・法学部	五十嵐　武士	教授
	樋口　範雄	教授
大学院人文社会系研究科・文学部	平石　貴樹	教授
	吉野　耕作	助教授
大学院経済学研究科・経済学部	大森　裕浩	助教授
	石原　俊時	助教授
大学院教育学研究科・教育学部	矢野　眞和	教授
社会科学研究所	Noble, Gregory	教授
社会情報研究所	田中　秀幸	助教授

以上25名

CPAS ニューズレター Vol. 4 No.2
平成16年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科附属
アメリカ太平洋地域研究センター
〒153 - 8902　東京都目黒区駒場3-8-1
TEL 03-5454-6137　FAX 03-5454-6160
http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/

編集：矢口祐人（編集長）　荒木純子

制作：株式会社　ウエタケ
〒101 - 0065　東京都千代田区西神田1-3-6
TEL 03-3291-3917　FAX 03-3291-3916